

つむじ曲がりな預言者



安息日午後 9月11日

暗唱聖句

「ましてわたしは十二万あまりの、右左をわきまえない人々と、あまたの家畜とのいるこの大きな町ニネベを、惜しまないでいられようか」。(ヨナ4:11、口語訳)

「それならば、どうしてわたしが、この大いなる都ニネベを惜みずにいられるだろうか。そこには、十二万人以上の右も左もわきまえぬ人間と、無数の家畜がいるのだから。」(ヨナ4:11、新共同訳)

今週の聖句

ヨナ1~4章、エレミヤ25:5、エゼキエル14:6、黙示録2:5、ルカ9:51~56、ユダ1~25

今週のテーマ

聖書の中で最も興味深い物語の一つに、ヨナの物語があげられるでしょう。彼は神の預言者であり、神について語る者であったのに、なんと神の召しから逃げたのです。その後、彼は劇的な方法で説得されて主に従います。従うのですが、その後どうしたのでしょうか。なんと彼が召されて預言をし、それによって悔い改め、滅びから救われたニネベの民が滅びてしまえばよかったのにと、神に文句を言ったのです。

いらだちを抱え、平安がない人間のなんとという例でしょう。ついに彼は、こう叫ぶのです。「主よどうか今、わたしの命を取ってください。生きているよりも死ぬ方がましです」(ヨナ4:3)。

イエスご自身も、ヨナの物語について言及しておられます。「ニネベの人たちは裁きの時、今の時代の者たちと一緒に立ち上がり、彼らを罪に定めるであろう。ニネベの人々は、ヨナの説教を聞いて悔い改めたからである。ここに、ヨナにまさるものがある」(マタ12:41)。事実、イエスはヨナよりも偉大なお方です。もしそうでなかったなら、彼がどうして私たちの救い主になることができたでしょう。

今週、私たちはヨナについて学び、彼のいらだちと平安の欠如から何を学ぶことができるかを考えたいと思います。

ヨナは、驚くほどに成功した伝道者でした。同時に彼は、少なくとも当初は、神の召しに対して非常に反抗的な預言者でもありました。ヨナの態度によらず、彼の人生は神の召しによって大きく変えられることになりました。神の軛を肩に載せ、それが負いやすく、重荷を軽くするという経験を代わりに、彼は自分の「休み」を見いだそうと決心します。そしてそれは、神が彼に行くように命じられたのとは反対の方向に逃げることでした。

問1 ヨナ1章を読んでください。ヨナは神の召しから逃れてどこに平安と休みを見いだそうとしましたか。そして、それはうまく行きましたか。

ヨナは、神の召しとは反対の方向に出発します。彼は、聖書のほかの多くの預言者たちが神に使命者として召されたときのように、神を説得することをやめようとしません（出4：13参照）。

興味深いことに、列王記下14：25にあるように、ヨナが神に召されて語ったのは、これが初めてではありませんでした。しかしながら、彼はこのときは、神の求めに従ったようです。しかし今回は違いました。なぜでしょうか。

古代史や考古学の記録文書は、ヨナがイスラエルの預言者として活動していた紀元前8世紀に古代近東地域を支配していた新生アッシリア帝国の君主たちの残忍性を記録しています。その75年後、新生アッシリアの王、センナケリブはユダに侵攻します。イスラエルとサマリアはすでに約20年前に陥落していました。どうもヒゼキヤ王は地元の反アッシリア連合に加わっていたようです。

そして今まさに、アッシリアにとっては勢力を広げる時が到来したのです。聖書（王下18章、イザ36章）やアッシリアの歴史文書、そしてニネベのセンナケリブの宮殿の壁画は、ヒゼキヤ王にとって南の国境守備の要として防備を固めていた要塞都市の一つであったラキシユの陥落を記録しています。ある碑文の中で、センナケリブは、彼が滅ぼした46の要塞都市から、20万人以上の捕虜を捕らえたと公言しています。アッシリアの王がラキシユを占領したとき、何百、何千もの捕虜が処刑されましたが、ヒゼキヤ王の忠臣たちは生きのまま皮膚をはぎ取られ、残りの捕虜たちは安価な奴隷労働力としてアッシリアに送られたのでした。

アッシリア人は、当時の古代世界の標準に照らしても、信じられないほど残酷でした。そして神は、この帝国のまさに中心都市にヨナを送り込まれたのでした。

ヨナが行きたくなかったのも不思議ではありません。

あなたは、今までに神から逃れた経験がありますか。もしあれば、その企てはうまく行きましたか。あなたは、その経験から何を学ぶべきでしたか。

ヨナは問題なく神から逃れたように見えます。しかし、彼の束の間の「休み」は、神が奇跡的に嵐をもって介入されたことによってかき乱されます。ヨナは、神がお命じになった魚によって、水中の墓から救い出されます。

しかしながら、大魚の腹の中での強いられた3日間の休みを通して彼が知ったことは、彼がどれほど神に依存しているかということでした。時に私たちは、自分が本当に必要としているのはイエスであることを知るために、この世が提供し、私たちが拠り所とするものが何もない所に連れて行かれる必要があります。

問2 魚の腹の中でのヨナの祈りを読んでください（ヨナ1：17～2：8〔口語訳2：1～9〕）。彼はどんな祈りをしますか。

海の深淵という非常に危険な環境にありながら、ヨナはその祈りの中で、聖所について祈ります。彼は神の「聖なる神殿」に思いを馳せます。大魚の腹の中で何が起きているのでしょうか。

聖なる神殿が、この祈りの焦点となっています。そしてそれは、一般的に祈りの中心となるべきものです。旧約聖書では聖所が、本来唯一神がおられる場所でした（出15：17、出25：8参照）。聖所は祈りと神との交わりの中心です。

しかし、ヨナはここでエルサレムの神殿ではなく、天の聖所について語っています（ヨナ2：8〔口語訳7節〕）。そこは、彼の希望が存在する場所です。なぜなら、神と神の提供する救いは、天からやって来るからです。

ヨナは遂に、この重要な真理を理解します。彼は神の恵みを経験します。彼は救われていたのです。魚が彼を吐き出したとき、彼は、逃げ出した預言者である彼に対する神の愛を初めて理解します。彼は確かに、どんな信仰者にとっても安全な唯一の道は（時にそれが遠回りに見えても）、神のみ心の内にあることであることを知ったのです。

こうして今、彼は神のご命令に従って任務を果たす決心をします。彼は疑いを捨てて信仰によって、遂にニネベに向かいます。彼がこのはなはだしく悪に染まった都市に向かって行くとき、この町の住民は、彼らの悪がどんなにひどいものであるかを語る異国の預言者を、好ましい存在とは思わないかもしれません。

私たちは時に、物事の全く新しい見方を手に入れるために、すべての物から離れる必要があるかもしれません。ヨナの物語では、彼は奇跡的に魚の腹から生還します。これは極端な例ですが、どうすればあなたも通常的环境から逃れて、おそらくあなたが必要としている新しい物の見方を手に入れることができるでしょうか。

ニネベはイスラエルのどの町と比べても、巨大な都市でした。ニネベは、「非常に大きな都で、一回りするのに三日かかった」(ヨナ3:3)。

問3 ヨナ3:1~10を読んでください。この邪悪な都市の反応はどのようなものでしたか。この物語を通して、私たちが他者を判断する上でどのような教訓を学ぶことができますか。

この町を巡りながら、ヨナは神のメッセージを宣言しました。「あと四十日すれば、ニネベの都は滅びる」(ヨナ3:4)。このメッセージは単刀直入でした。詳しいことは述べていませんが、このメッセージは聞く耳のある者には明解で、わかりやすいものでした。ニネベの人々は(町全体が)、ヨナの警告の言葉を信じたのです!

典型的な近東の習慣として、心の変化〔悔い改め〕を表すためにニネベの王が出した布告は、民はすべて、動物も含めて断食し(どのように動物が断食するのかは記されていませんが)、嘆き悲しまねばならないというものでした。王も王座から降りて、灰の上に座しました。それは彼らの〔悲しみを表すための〕重要な象徴的行為でした。

問4 ヨナ3:6~9を読み、エレミヤ25:5、エゼキエル14:6、黙示録2:5と比較してください。王の訓戒には、彼が真の悔い改めを理解していたことを示すどんな要素が含まれていますか。

王の訓戒は端的で的を射たものでしたが、真の悔い改めに関する正確な神学的理論にもかなうものでした。ヨナが説教している間、聖霊がニネベの人々の心に激しく働いたに違いありません。ニネベ人たちにとって、イスラエルが神に愛情をもって導かれた話など聞いても、何の利益もなかったはずですが、しかし彼らは、神に前向きな態度をもって応えました。その結果、彼らは次のように言います。「神の憐れみのもとに我々自身を投げ出そう。我々の功績に頼ってはならない。完全に神の善意と憐れみに信頼しよう」

おかしなことに、個人的に直接神の恵みを体験したはずのヨナは、神の恵みは、その中に休む資格を備えた者だけに限られたものだと考えたようです。

クリスチャン経験の中で悔い改めは、なぜこれほど重要なのでしょうか。特に何度も繰り返してきた罪の場合、真に罪を悔い改めるとは何を指すのでしょうか。

残念なことに、ヨナの物語は3章で終わりません。

問5 ヨナ4:1~11を読んでください。ヨナの新たな問題は何でしたか。彼の欠点の多い性格から、私たちは何を学ぶことができますか。

ヨナ書4章は、宣教活動が成功したため、ヨナが神に対して怒るところから始まります。ヨナは自分がばかにされるのではないかと心配します。ここで神は、小さな子どもが癩癩を起こしたようにふるまうこの預言者に、彼らを滅ぼさなかった理由を話して聞かせる時間をお持ちになります。

ここに、心から神に従う者（たとえ預言者）であっても、成長し、勝利しなければならぬ弱さを持っているという証拠があります。

「ニネベは、邪悪ではあったが、荒布をまとい、灰の中に座して悔い改めたので、神は町を滅ぼすことをおやめになった。それを知ったヨナは、神の驚くべき恵みをまず第一に喜ぶべきであった。しかし、彼は、そうせずに、自分が偽預言者であると思われるのではないかとばかり心配したのである。彼は、自分の名声を守ることに心を奪われて、その悲惨な町のなかの人々に、大きな無限の価値のあることを忘れていた」（『希望への光』493ページ、『国と指導者』上巻238ページ）。

預言者に対する神の忍耐は驚くべきものです。神は意図してヨナをお用いになられたように思えます。ヨナが逃げ出したときには嵐を送り、この逃亡者を連れ戻すために魚まで用意されます。さらに今また、意固地になっているヨナに、「お前は怒るが、それは正しいことか」と仰せになって、彼に自分の悪い態度を反省させようとされます（ヨナ4:4）。

問6 ルカ9:51~56を読んでください。この物語は、ヨナの物語で起きたことと、どんな点が似ているでしょうか。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」（ヨハ3:16）。あるいは神は、ヨナ4:11では、「それならば、どうしてわたしが、この大いなる都ニネベを惜しまずにいられるだろうか。そこには、十二万人以上の右も左もわきまえぬ人間と、無数の家畜がいるのだから」と言われます。私たちではなく、神が最終的に心と意思と動機を裁かれるというのは、いかに感謝すべきことでしょうか。

神のように、他者に対して憐れみと忍耐を持つにはどうすればいいでしょうか。少なくとも、神の憐れみと忍耐を反映することはできないでしょうか。

ヨナは自分が考えるよりも、もっと問題でした。ニネベは危険な存在でしたが、ヨナの物語の中では、ニネベ人が問題なのではありませんでした。彼らはメッセージを理解し、すぐに悔い改めました。宣教師であったヨナは、この宣教師物語の中で見る限り、弱い者であるように見えます。

この解釈によれば、神は、ニネベ人がこの宣教師のメッセージを聞く必要があった以上に、ヨナ自身がニネベに行く必要があったことをご存じだったので、この神の召しをいやがる預言者に付きまとわれたのです。

問7 ユダの手紙を読んでください。私たちはどのようにして、「神の愛によって自分を守」ることができるのでしょうか（ユダ21節）。それは何を意味するのでしょうか。

新約聖書のこの短い手紙の中で、ユダは私たちに、「神の愛によって自分を守り、永遠の命へ導いてくださる、わたしたちの主イエス・キリストの憐れみを待ち望みなさい」（21節）と述べています。

個人的に神の愛と恵みを体験することは、一度限りのことではありません。「神の愛によって自分を守る」ための確かな方法は、他者の必要に応えることです。続く節でユダは私たちに、「憐れみなさい。ほかの人たちを火の中から引き出して救いなさい」（22、23節）と言っています。

神がヨナをニネベに行くように召されたのは、おそらく、ヨナがこの特別な召しを受けるまでは、彼とアッシリア人との関係についてあまり考えたことがなかったからでした。おそらく彼は、自分が彼らを好きでないことはわかっていたでしょう。しかし、どれほど彼らを憎んでいるか、または、召しを受けた後でさえも、彼らを避けるために極端な行動を取るとは思っていなかったことでしょう。ヨナはニネベ人を、天の隣人として迎える準備ができていませんでした。ヨナは、神が愛するように愛することを学んでいませんでした。神はニネベ人を愛し、神の国に迎えるために、ヨナをニネベに行くように召されたのです。ヨナが神と共に働くことを通して成長し、神により似た者となることを、神は望んでおられました。神はヨナに、神との救いの関係に入ることによって、そして神のみ心を行うことによるのみ得られる、真の休みを見いだすことを望んでおられたのです。そしてそれは、私たちが他者のところに出て行き、彼らに私たちが持っている信仰と希望を指し示すことをも含んでいます。

あなたは他者の救いのために、どれくらいの時間を使っていますか。この働きは、どのように私たちがイエスにある真の休みへと導くのでしょうか。

「ヨナは、この任命が与えられて、大きな責任を負わせられたのであった。しかし、彼に行けと命じられたお方は、彼のしもべを支え、彼に成功を与えることがおできになるのであった。もしヨナが、何の疑いもはさまずに従ったならば、彼は多くの苦い経験に遭うこともなく、豊かに祝福されたことであろう。しかし、ヨナが失望に陥った時にも、主は、彼をお見捨てにならなかった。種々の試練と不思議な摂理によって、神とつきることのない神の救いの力に対するヨナの確信は、回復されるのであった」(『希望への光』491ページ、『国と指導者』上巻233ページ)。

「最も単純でささやかな方法によって、幾千という人々の心にふれることができる。世の最も才能のある男女と見られている人々、最も知能のすぐれた人々は、世の人が自分の一番興味をもつ事柄について自然に話すのと同様に、神を愛する人が神の愛について話すその単純な言葉に、新鮮な感動をうけることがよくあるのである」(『希望への光』1275ページ、『キリストの実物教訓』211ページ)。

話し合いのための質問

- ① 人々が救いを受け入れるために神に召されたにもかかわらず、そうなったことに腹を立てる「神の預言者」がいるでしょうか。ヨナの取ったそのような態度をどのように理解するべきでしょうか。この物語はまた、与えられている光に反して行動する神の民に対する神の忍耐を示していると言えないでしょうか。
- ② ヨナの物語は、神が強情な人々を救おうとされるだけでなく、神に従う人々をつくり変えることにも大きな関心を持っておられることを示しています。私たちは、すでに主と現代の真理を知っている者として、どうすれば「新しい心」と「新しい霊」を自分のものとすることができるでしょうか。
- ③ ユダの手紙をもう一度読んでください。この書の本質的なメッセージは何でしょうか。そしてそのメッセージは、なぜ現代の教会としての私たちにも関係があるのでしょうか。
- ④ 他者の救いのために働くことは、私たちにとっても、どのように大きな靈的祝福となりますか。
- ⑤ ヨナが、ニネベに行かないために、どんなに良い理由や考えを探したとしても、神は彼の考えの誤りを示されたことでしょうか。私たちも他者に対して、ヨナが取ったと同じような誤った態度を取ることがないでしょうか。